



地域の鎮守の神にささげてきた感謝

一つの伝統を生み出した母と娘がつなぐ二つの舞

ゆっくりと、力強いその動きが周囲に厳かな空気を漂わせる——。10月20日、毎年決められたその日、千二百年の歴史を持つとされる金田稲荷神社にとって最も重要な祭礼「例大祭」が執り行われます。そこでたった一度だけ舞われる「朝日舞」。本殿で息を呑み見守る関係者の前で、神職だけに許されたその舞を奉納したのは宮司の娘・阿部見知子さん。東京の神社本庁に勤め、毎年この祭りに合わせて帰省しています。

かつて見知子さんが奉納したもう一つの舞があります。今では地域の小中高生が披露し、神事で親しまれている巫女舞。「豊栄舞」と呼ばれるその舞は、14年前、福岡県の祭祀舞の指導も行う母・大美さんの指導のもと、見知子さんによって初めて奉納された舞でした。神事の簡素化が進む中、儀式本来の姿を目指し、母と娘が始めたその舞は、今では一つの伝統を形作っています。

この二つの舞は、まさに神への奉納。祭りの語源は神仏へのささげ物を表す「奉る・祀る」に由来すると伝えられています。太古よりさまざま

のぼる朝日のように颯爽と神職のための「朝日舞」

神社本庁が定めた神職が舞うための祭祀舞の一つ。主に男性が舞うことを想定し、勇壮な力強い動きが特徴。歌詞には神前に向かう心構えと感謝が込められている。

アサヒマイ



↑地域の子どもたちは舞の練習のため夜も稲荷神社に集まる。神幸祭期間中、本殿入口は神の通り道として開けられている。

まな神々を祀ってきた日本。「初詣」のように祭祀の意識は薄くても、現代生活に根付いている習慣は少なくありません。地域に寄り添い、人々の生活に密着してきたこの神社の祭り。各地で祭りが縮小し、姿を消す中、神を敬う風習を背景に、絶えず今日まで受け継がれています。



↑かつては巫女舞をつとめた見知子さんも、今では神職として祭りに臨む。奉納された朝日舞は、10月20日の稲荷神社の例祭で、ただ一度だけ舞われる。



恵みと命への感謝を込めた乙女たちによる「豊栄舞」

神社本庁制定の祭祀舞の一つで女性が舞うことを想定し「乙女舞」とも呼ばれる。町内では毎年地域の学生が募集され、今年は飯土井神社で小学生6人、稲荷神社では中高生5人が舞を奉納した。

トヨサカノマイ



伝統はなぜ継がれるのか

「思い」がつなぐ「継ぎゆく」伝統

金田のすべての地区が待ちわびる秋祭り。そこには古からの「生きることへの思い」が込められている。時を越えても変わらない「祈り」「感謝」「願い」——。地域生活に密着した祭りに宿る「思い」を追った。



込められた「祈り」

神幸祭と伝統の神事

山々が紅く色づき始め、稲穂実る10月。金田・神崎地区では2週にわたり2つの神社の神幸祭が行われ、地域は祭り一色に染まる。囃子の音色が響く中、獅子が舞い、豪華絢爛な山笠が町内を練り歩く。「五穀豊穣」「無病息災」。その伝統にはいつの時代も変わらない人々の祈りが込められている。



神事一つひとつに理由がある。



農耕を主とする我が国は、季節ごとの「祈り」と生きてきました。春は豊作を祈り、夏は害虫被害や水害よけを願ひ、秋は収穫に感謝し、冬は一年の無事を喜び、生きる力を蓄える。移ろう四季それぞれに思いがあり、それが祭りという形で今に受け継がれています。収穫への感謝を込めた秋の神幸祭。豊作の喜びと健康への感謝を地域ごとで祝うのがこの神幸祭であり、山笠、獅子舞、巫女舞などの神事が奉納されます。生活に密着している祭りだからこそ、人々の心を動かし、絶えず地域の楽しみであり続けているのです。

飯土井神社と稲荷神社の両神事を担う阿部重信宮司は、「山笠の華やかさに目を奪われがちですが、神事には全て行う理由があります。先人たちが大切にしてきた思いを感じ、祭りに携わる全員が伝統をつないでいる自覚をさらに共有してほしい」と力を込めました。かつて囃子方は、学校の早退もできた神幸祭。しかし今は少子化による担い手不足など、時代に合わせてその姿は変化しています。それでも祭りはどんなに厳しい社会情勢の中でも続き、幾度もの困難や途絶の危機を乗り越え、今に至っています。人の思いがつかないできた伝統は、かけがえない守るべきものとして、地域に根付いています。

祭人の声

山笠制作に魅せられて

町部山笠(剪定士) 兼本修さん



若い頃は全く祭りに興味がありませんでしたが、地域の役員がきっかけで山笠制作を手伝うようになりました。今では山笠の杉壁は全て私が作っています。やはり、ここに囃子方が乗った姿を見ることがうれしいですね。一つの山笠を心一つに作り上げる。そんな関わりや楽しみもあるんですよ。



←「ここに気づいてもらえたらうれしい」。兼本さんのこだわりは竹を削り描く模様。

→囃子方が長時間足をかける杉壁。丁寧に滑らかに仕上げます。



↑戦後間もない頃、材料不足の中、松の木1本だけで建立した山笠。

先人から継ぐ命への感謝

山笠

福 智の山笠は城の屋根のような破風が特徴で「屋形削り」と呼ばれる。以前は稲穂をかたどった馬簾が飾られていたが、時代とともに博多などの影響を受け豪華な人形山となり、祭りを彩っている。



旗持ち行列

参 勤交代の大名行列を模した行列が神輿につきそう。本来は槍や弓、旗など約50人の順番があるが、今では進みやすいように調整されている。赤・青の鬼が先導し、鬼に泣く子どもは強く育つとされる。



神輿

神 輿は神が各地域を巡行する乗り物の役目を担う。神社から御旅所までの行程を「お下り」その逆を「お上り」と呼ぶ。宮司が神輿に神をのせる儀式では周囲を隠し「見た者は目が腐る」と伝えられている。



獅子舞

雄 獅子と雌獅子の2体の舞い。稲荷神社神幸祭では稚児舞とともに氏子である金田一区の青年が神社と御旅所で奉納する。獅子は邪気を食べるとされ、子の成長を願ひ、頭を獅子にかませるのが恒例。





【囃子指導者：岩井義則】演奏歴70年以上、主に町部や宝見地区で指導を行う町内最古参の囃子指導者の一人。笛を吹けなくなり、第一線を退いた今も、受け継ぎ体に刻み続けてきた鼓動を子どもたちに伝える。



↑今は息子の久幸さんが実技指導を担う。「まずはうまい人を見なさい」との岩井さんの言葉に従い、若者たちは真剣なまなざしでその指使いを追う。

「囃子」の音色を聞くと、誰もが祭りを思い起こす。笛が先導し、太鼓と鉦がリズムを刻んでいく。祭りに欠かせないこの旋律を指導者として後世に伝えてきた岩井喜則さん。金田本町で生まれ、幼少時から囃子に親しみ、72歳まで現役を続けました。今は第一線を退きましたが、要所を押さえた的確な指導で尊敬を集めています。楽譜のない囃子は「口伝」が伝統。鉦から始まり、小太鼓、大太鼓、笛と段階を経て、全て習得するまでに10年以上かかる

山笠を動かすのは囃子。苦しい時こそその鼓動が必ず引き手を奮い立たせる。



↑神幸祭の日は、必ず指導する町部の山笠を見に行く岩井さん。弟子たちから敬意を込めて「大師匠」呼ばれる岩井さんの姿に、思わず笛の手も止まる。

受け継いできたこの囃子を絶やさず正確に伝えたい。



「囃子」の音色を聞くと、誰もが祭りを思い起こす。笛が先導し、太鼓と鉦がリズムを刻んでいく。祭りに欠かせないこの旋律を指導者として後世に伝えてきた岩井喜則さん。金田本町で生まれ、幼少時から囃子に親しみ、72歳まで現役を続けました。今は第一線を退きましたが、要所を押さえた的確な指導で尊敬を集めています。楽譜のない囃子は「口伝」が伝統。鉦から始まり、小太鼓、大太鼓、笛と段階を経て、全て習得するまでに10年以上かかる

習い伝わった伝統の旋律を
変わらない音色で次の世代へつなぐ

囃子 岩井喜則

Yoshinori Iwai



↑まとめた冊子には、各曲の出だしの笛の押さえ方や太鼓を打つタイミングなどが細かく記されている。時折それを見返し、再確認を怠らない。



↑先代までは無かった鉄砲を持つ人形なども制作。配置にも細心の注意を払い、山笠全体で物語をつむいでいく。



↑「じいちゃん、とうちゃんともっと仕事をしてみたかったですね」。今では2人の技を伝えるのは残された人形のみ。対話のように観察し技を学びとる。

富田人形の命は顔。
じいちゃんが生涯をかけ
築いた技と魂を守りたい。



【人形師：富田能央】幼少時から稼業を手伝い、基礎的な技術を学ぶ。一度は別の道を志したが、9年前に再度人形と向き合うことを決意。若い感性と妥協を許さない向上心で、日々新たな作品を生む三代目棟梁。

人形師 富田能央

Yoshinisa Tomita

魂受け継ぎ現代感覚で革新目指す
伝統守る富田人形の若き三代目



京 都の屋形山に由来し、博多祇園山笠の流れをくむ福智山笠最大の特徴は、合戦絵巻を表す勇壮な武者人形たち。初代・富田八十六氏が一代で築きあげ、今にも動き出しそうな形相の力強い作風で町内外から愛されています。その「富田人形」の三代目棟梁・能央さん（弁城）祖父の技をつなぐ一人です。人形作りを稼業とする家系ですが、一度は別の仕事に就いた能央さん。しかし二代目の父・泰昌氏と祖父を続けて亡くしたことから稼業を守ることが決意し、24歳にして現場を取り仕切る棟梁となりました。



↑初代から伝わる、飾りや人形の部品を切るためのたがね。同じものは今では作れず、補修を繰り返し打ち込んでいる。

常に時代を見据え
変化を目指しています。

「富田人形の指導は昔から「技は目で盗め」という職人気質のスタイル。幼少時から人形に関わる能央さんでも、その技を指導無しで得るには並々ならぬ苦労がありました。祖父の代からの顧客を相手に、年上の職人仲間と作業する日々。常に重圧を感じる現場でも「先代までと必ず比べられる。その分飾りや細かい部品、モデルとなる武将の背景にも気を配ります」と一人一倍努力を重ねてきました。各時代の物語を忠実に再現しつつ、前例にとられない能央さんの作品は「柔軟で斬新」と依頼する地域から好評です。

今年、自身も「名誉なこと」と語る博多地区での展示も実現するなど、活動の幅を広げた能央さん。「祖父が残した技術、父が大切にされた地域や職人との信頼の上に今の富田人形がある。年々山笠を建立する地区が減る中で、人と人をつなぐ力を持つ祭りに人形師として力になりたい」とさらなる成長を誓いました。時代と向き合い、新たな作風を模索する挑戦は続きます。

伝統を曲げてでも残したい慣例
熱い思いが創り上げた金色の競演

金田・神崎山笠競演会

そこに「思い」があるならば

山笠存続の危機 絶やさないための選択

電飾輝く華麗な山笠が集結する「金田・神崎山笠競演会」。2週間の祭りを締めくくるとこの催しにも、伝統をつなぐための決断と関係者の熱い思いが込められていました。昔から神幸祭を終えた金田各地区は、山笠を激しく上下させながら回転する「練り回し」を競う



ことが慣例でした。その格好の会場が平成筑豊鉄道金田駅前前の広場。しかし「駅前」と呼ばれたその会場で、若いエネルギーがぶつかり合う競演は負傷者も多く、

く、広場が公道に整備された後は警察との衝突も絶えませんでした。そして昭和61年、その悲劇は起きてしまいます。駅前を立て続けに起きた死亡事故。そこから一度山笠建立は途絶え、数年後に再興した後も隔年の建立となるなど、祭りの火は消えつつありました。

各地区の代表者たちは、事故の原因は明確なルールと適した競演の場が無いことと考え、計画的な競演の実施を提案します。

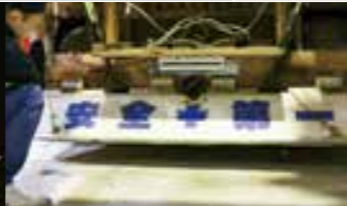


積み重ねて新たな伝統へ 現代の「駅前」の誕生

4年目には町からの支援も決定し、競演会は公式にイベントとしてのスタートを切りました。神崎地区の山笠の参加も積極的に受け入れ、進化を続けて17回。今では町の欠かせない観光資源の一つにもなっています。そして自主開催の3年を含め20年目の競演となった今年、電飾山笠全10基が同じ時間・同じ会場に初めて集結。イベント発足時から尽力してきた池田昇事務局長は「この光景をずっと思い描いていた。行事も30年続けば伝統と言われる。このイベントを新たな伝統にしたい」と目を

細めました。

開催前には各地区代表と組織的に安全管理の徹底を協議し、事故から30年以上死者を出すこと無く、今日を迎える山笠競演会。祭りへの愛が創り上げた「練り回し」の会場は、今の若者たちにとって年に一度、思いをぶつけることができる現代の「駅前」であり続けています。



↑過去の事故を教訓に、今では多くの山笠の下部には巻き込み防止の板が取り付けられている。



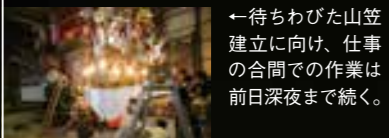
↑競演会の熱気がまだ冷めない中、各地区代表の実行委員は会場の片付けにあたった。

憧れを形にした山笠

南陽会(神崎)
有藤 義行 会長



子どもの頃、山笠の無い私たちの地区はいつも祭りに憧れを抱いていました。太陽と南木地区が合同で南陽会を発足し、手探りで12年。2年に1度の参加ですが、その分強い思いが私たちにはあります。競演会があるからこそできたこの山笠を守り続けます。



←待ちわびた山笠建立に向け、仕事の合間での作業は前日深夜まで続く。



祭りのあと—



特集

継ぐ

終

継がれてきた伝統が、地域のつなぐりをさらに強めていく。数か月かけて丹精込めて作り上げた山笠も、解体が始まると半日で華麗な姿を消す。それでも関わる人々はさびしさを胸にしまい、作業を終えるとまた日常へと戻っていく。祭りのあとも消えずに残る大切なものがある。共有できる思い出、ともにした時間が生んだつなぐり、支えてくれる地域への感謝——。それらを胸に人々は前を向き、また次の祭りに思いをはせる。



↑無事競演会も終わり、法被姿での最後の夜。地域をあげての団らんは、日付が変わるまで続いた。

つなぐ「願い」

交差する伝統と地域のつなぐり

縦につないできた伝統が地域のつなぐりを横へと広げる。かけがえのない祭りが、地域を未来へとつなげていく。

祭りが伝える感謝の心 地域と伝統を次の世代へ

「秋祭りは『ありがとう』の祭り。みんなも感謝の気持ちを忘れないで」。池田事務局長が優しく語りかけると、児童は笑顔で応えました。神幸祭を終えた11月14日、金田小3年生78人に向けた「祭り」の授業。



↑池田事務局長(写真右)が山笠の成り立ちや祭りに込める思いを、阿部宮司が神幸祭の歴史を担当し分かりやすい表現で解説。

祭りの声

離れて感じる温かみ



上金田山笠
森野 大地 さん

5年前から仕事で県外に出ていますが、神幸祭の日だけは必ず帰ってきます。就職初年に始めて参加できなかった後悔は今も忘れません。一年に一度しか会わなくても、昨日会ったかのように受け入れてもらえる。地域の温かさを祭りの度に感じています。



←笛の練習は当日のみ。しかし一度耳についた囃子は指先で覚えている。



↑町の文化祭では11月3日から2日間、各地区の法被(はっぴ)や神幸祭の写真を展示。子どもたちは自分の地区を誇らしげに探していた。

「楽しむだけではない、祭り本来の意味が薄れないよう伝えていきます。我々が子どもの頃感じた祭りへの憧れは今の子どもと同じ。次の世代に伝統と受け継ぎ続けてほしい」。地域のことを学ぶ課外活動の中で、一番関心の高かった「祭り」が授業内容として選ばれ、今年で8回目。池田事務局長と阿部宮司、長年祭りを見つけ続けてきた2人の講師の説明に、児童は目を輝かせて聞き入りました。年齢問わず愛される最大の地域行事である祭りは、いつの時代も子どもたちの心を強く引きつけます。コミュニティ内の人と人とのつながりが希薄になり、地域の課題を地域で解決していく地域力が求められる中、「祭り」が残る地域は人口が減ってもつ

ながりが強いと言います。参加した全員が、意識しなくても伝統を担う一員、そして自らが暮らす地域の一員です。命への感謝、つなぐりへの感謝、祭りを支えてくれる人たちへの感謝、そしてまた祭りができる事への感謝——。この祭りで分かち合える大切なものを次代へとつなげる。そんな地域の人々の願いをのせ、またあの囃子の音とともに、祭りの日はやって来ます。

祭りの声

この地域で祭りと生きて



上金田婦人会
辰島トシ子 さん

この地域で生まれて90年、幼い頃から祭りはいつもそばにありました。今は若い人は共働きも多く、地域での協力は必ず必要です。祭りはみんなで作り上げ、みんなで支えるもの。婦人会でも最高齢になりましたが、できることはなんでもしたいと思います。



↑神幸祭の当日、山笠5基が町内の老人ホームを訪問。入所者は聞き慣れた懐かしい囃子に思わず手拍子を送る。

→神幸祭の当日、婦人会が準備した130人分の料理が疲れを癒やした。



平原

【参加】
稲荷神社神幸祭
金田・神崎山笠競演会



人見

【参加】
稲荷神社神幸祭
金田・神崎山笠競演会



宝見

【参加】
稲荷神社神幸祭
金田・神崎山笠競演会



町部

【参加】
稲荷神社神幸祭
金田・神崎山笠競演会



上金田

【参加】
稲荷神社神幸祭
金田・神崎山笠競演会



金田区

【参加】
稲荷神社神幸祭
金田・神崎山笠競演会



南陽会

【参加】
金田・神崎山笠競演会



神崎 子ども山笠

【参加】
飯土井神社神幸祭
金田・神崎山笠競演会



神崎 四区

【参加】
飯土井神社神幸祭
金田・神崎山笠競演会
(垣田山笠愛好会として参加)



神崎 三区

【参加】
飯土井神社神幸祭



神崎 二区

【参加】
飯土井神社神幸祭
金田・神崎山笠競演会
(神崎二山笠愛好会として参加)



神崎 一区

【参加】
飯土井神社神幸祭



金田／神崎

山笠

KOUZAKI → KANADA
YAMAKASA Festival
金田・神崎山笠全基総覧
10.13-14 → 10.20-21
金田・神崎両地区から各6基の山笠が町を練り歩き、地域を祭り一色に染めた秋の神幸祭。紙面上だからこそ実現した、山笠全基一挙公開。

山笠 12基一挙紹介

Yamakasa of Fukuchi



● 金田・神崎山笠競演会

イベントパークに過去最多の10基が集結。東西に別れ10分間で会場を沸かせました。

豪華 華絢爛、勇壮華麗。各地区が一心に建てた思いが宿り、それぞれの個性を豊かに表した山笠たち。最大で高さ10mにもおよぶ本体に据えられた色彩豊かな装飾と暗闇を照らす電飾の光。昼夜で違う姿を見せるその威容は、見るもの全てを魅了しました。



● 稲荷神社神幸祭

神事を神社下で静かに見守る山笠。獅子舞・稚児舞とともに6基が祭りを彩りました。



● 飯土井神社神幸祭

行列を先頭に村回りを終え、13日夜は御旅所で電飾山笠5基が競演。